

『国際協力のひとこま』 ②

★事業事例紹介／

持続的農村開発のための普及員育成(生活改善アプローチによる)コース：JICA 筑波から受託(2022年8月から9月実施)

— 【副題】日本の歴史(ひと昔まえのこと)に目を向けてみませんか?! —

筆者が、子供のころ住んでいたのは、地方(田舎)の農村であり、今の様な便利さ、物の豊富さなど嘘のような生活ぶりだと感じています。

例えば、筆者の祖母が、庭先で洗濯のために、金盥(かなだらい)と言われる洗面器の大きなもの(直径1m程度、深さ20cmくらいのトタン製)に、水を汲み、洗濯板で、衣類を洗っていました。また、ご飯炊き・煮物料理に、カマドに鍋などのせて、薪(まき)を燃やし、煮炊きをしていました。(下図参照)



こうした当時の暮らしでは、中腰での作業となり、腰に負担がかかりますし、かまどで、薪が燃える都度、煙にむせてしまい、短時間の手伝いであっても大変だった記憶があります。ですが、そんな日本でのひと昔前の大変な農村家庭の風景は、半世紀に満たないうちに、次々に改善され、現在は便利という言葉では言い表せないくらいに変わって来たと思います。

では、日本の一昔前から現在まで、如何にして、便利かつ物が豊富な状況に前進したのでしょうか。新しく開発される電化製品や工業製品のおかげもあるかと思いますが、そればかりではありません。第2次世界大戦直後に目を向けてみますと、当時、農林水産省が日本国内、特に、農村部(中山間地)での生活水準に目を向け、生活改善普及事業という取り組みがその一つのきっかけのようです。農家の農業生産向上の促進と並行して、農家内の生活面全般を改善し、合理化することを目指したものとして、生活改良普及員という存在が大きな貢献をもたらしてくれたようです。

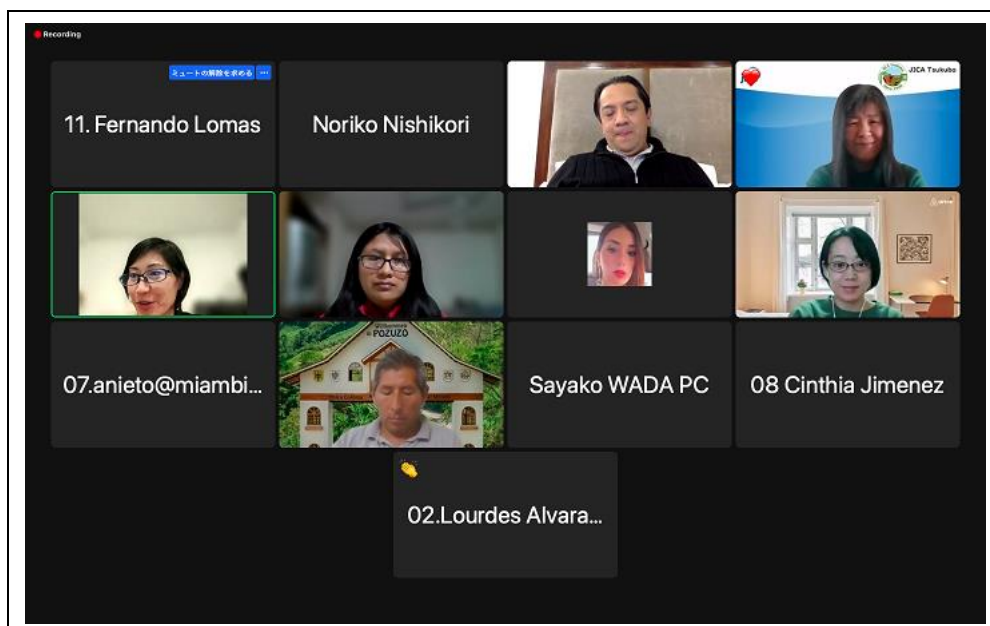
さて、話題は飛びますが、世界に目を向けますと、発展途上国と言われる国の一部では、一昔前の日本の日常同様、或いはそれ以上に不便、物が十分ないと言えるところが多くあります。発展途上国の多くでは、農業に依存し、さらに当該国内の地方の農村部には、都市部と違い、近代的な物資が新たに取り入れられることが少ないようです。そうした農村生活での不便さが多くある地方(農村)の問題を解決するために、前述の日本が数十年前の改善運動を通じた経験が、発展途上国の農村の生計向上に、有効ではないか、活用出来る可能性に触れられた情報もご紹介します。(引用元；日本の生活

改善運動と普及制度（水野正己氏著））右、同様に、ここ 10 数年間近く、当法人においても、生活改善アプローチによる農業農村開発を目指す研修員受入事業に生かしています。



ということで、一例ですが、研修対象国として、日本と似た地形（山がち）で、国土も狭い中央アメリカ諸国の国づくりに、この生活改善アプローチと一緒に考える支援事業を展開しています。同研修プログラムとしては、各国の農村の生活状況を分析すること、日本での生活改善の理念とその実践例、生活改良普及員の役割などから、さらに日本国内の地域（地方）で活動されている住民グループの実践事例、工夫などの視察など構成しています。本研修コース取り組みは、継続的に実施し、参加国それぞれでは、二桁以上の人数の普及員の育成に貢献してきております。

ただ、残念なことに、ここ 3 年ほどは、新型コロナウイルスの影響で、従来の研修員の入国管理に制約が多く、来日が叶わないため、遠隔（オンライン）方式での研修を余儀なくされました。遠隔研修では、先方との時差（ほぼ地球の裏側）を考慮した限定的時間帯でのプログラムですが、多くの研修員（2022 年度は、9 か国から 15 名）が、積極的に参加していただきました。



対面実施では、一方通行の講義（理念等）以上に、お互いが意見交換、討論などで、相互に学び

合う環境が整い、容易いと思います。一方、遠隔方式での不便さ、実質的距離間以上の遠さ・コミュニケーションの難しさを超え、双方向のやりとりなど実現出来るよう、様々な工夫を凝らし、取り組んできました。

その1例として、遠隔通信アプリの副次的機能を活用し、発信側から全受信者に講義形式での発信のみならず、全送受信者を少人数ずつ、数グループに分けて、講義理解を踏まえ、さらにお互いが、講和内容をより咀嚼するべく、研修員同士、或いは研修員と当方ホスト（講師等）の小グループの間での討論、意見交換の時間を多く取り入れました。その他、来日での研修での現場視察を通じの改善取り組み（当該関係者との意見交換など有効）を疑似体験出来るよう、オンライン環境においても、少しでも生かすべく、視察地での活動を録画教材として前もって準備し、さらに動画視聴に加え、当該施設関係者の方と質疑、意見交換をオンラインでの工夫を凝らしています。

オンラインでの関係者の生の声（例）

**【生活改良普及員のどんなサポートが役立ったか】**

食品の加工を始める際、なかなか自分だけではやっていけないし、勉強してもなかなかできないので、普及センターの先生が、実際に私のところに来てくれ、手取り足取り教えてくださいました。

また参加国との時差対応の限られる短時間内の講義、演習、意見交換の日々ですが、約2か月のプログラムにおいて、研修員それぞれ、本来（自国）の業務につきながらの厳しい状況下ではありますが、精力的に参加いただきました。

なお、本稿で取り上げた研修員受入事業では、研修修了をもって真の終了ではありません、学びはそのまま導入するのではなく、帰国後の取り組みならびに同計画応用出来ないという意味があります。その様子は、機会があればご紹介させていただきます。お楽しみに。

結びにあたり、開発支援・国際関係に興味・関心を持たれる方にとっては、発展途上国の現場がどのような状況であるか、実際の住民たちの生活ぶりなど、現場に目を向け、実情に目を向けることも重要ですが、冒頭ご紹介させていただいたような、自分たち、つまりは、日本の現状が、どのように変遷してきているのか、目を向け、過去の歴史を振り返ってみては如何でしょうか。また【歴史は繰り返す】と言う視点も重要だと思いませんか。

以上

#生活改善 #セイカイ #農村開発 #生活改良普及員